

# Father land / Mother tongue

## ドイツ語作家シェルコ・ファタハにおける祖国と言語

鈴木克己

### I. 境界のプロロゴス

ある線を境に生まれた場所がわずか1センチ左右に分かれただけで、その後の人生が大きく異なることがある。第二次世界大戦後、すでに成人に達していたドイツ人の中には、1949年に占領が解かれて東西両ドイツが建国されると、その社会体制の違いを考慮して積極的に自らの暮らす国を選択する者もいたが、多くの人にとってはどちらで暮らすかは消極的な選択だった。つまりそのとき暮らしていた場所に留まるというものだった。とりわけかつての帝都ベルリンに住んでいた人にとっては。だが、徐々にその違いの大きさを感ずるようになると、ベルリンでは東から西へと亡命する人が出るようになり、その数は週単位で数千にもなった。そして1961年8月13日、日付が変わった深夜、ベルリンの東西を結ぶ交通が突然遮断された。この日の早朝に目覚めた西ベルリン市民たちは、自分たちが支柱と有刺鉄線で取り囲まれているのに気づき、呆気にとられていたが、それが次第に怒りへと転じていった。はじめは手で押し広げれば通り抜けられるような境界だったが、その後、間に合わせとはいえ、コンクリートのブロックの堅牢な壁が築かれ、ついに、地雷の埋められた緩衝地帯と見張り台まで築かれることになる<sup>1</sup>。

本稿で取り上げる作家シェルコ・ファタハは、このベルリンの壁が築かれた3年後の1964年、ドイツ民主共和国(東ドイツ)の首都ベルリンで生を享ける。ただ彼が普通の東ドイツ市民が抱えた問題を共有することがなかったのは、父親がクルド系イラク人であったからだ。父は東ドイツで奨学金を得て、大学に通い、その後、通訳として東ドイツに留まり、ドイツ人女性と結婚する。そしてシェルコが生まれる。社会主義体制の指導者層に属していたわけではなかったが、イラクのパスポートのおかげで、一家は数ヶ月単位で父の故郷スレイマニヤに滞在することができた。そして1974年、ウィーンを経て一家はドイツ連邦共和国(西ドイツ)のベルリンに移住する。そこはドイツ民主共和国から見ると、

---

<sup>1</sup>クリストファー・ヒルトン『ベルリンの壁の物語』(上・下)鈴木主税訳、2007年、東京、及びフレデリック・ケンプ『ベルリン危機1961』(上・下)宮下嶺夫訳、2014年、東京、参照。

自国に浮かぶ地図上の空白地帯だった。

壁を越えて生きることが許されたファタハは、壁の向こうに留まらざるを得なかった人たちは異なる運命を迎え入れることになる。それは自由を手に入れただけでなく、父の土地と父のことば、そして母の土地と母のことば、さらに自分の生まれた土地との一本の線で結べぬ関係に身を置くことになる。この関係性こそがこれまでの彼の執筆の原動力であることは確かだ。これまで発表された小説6編すべてに、様々な理由で生まれた土地から引き離された者たちが登場してくる。とりわけイラクを出ていかざるを得なかったも者たちが、その小説の主人公にならなくても、印象に深く残る。そうしたものの背後には、ファタハが父の国イラクを、ひいては父親自身を理解しようという意図が隠れているのではないか。だがそれは、自分探しの行き着く先としての父の国ではない。あくまでも東ドイツに生まれ西ドイツで育った自分という縦糸に父と母の横糸を織り込みながら物語を紡ぎだしている。ここでは移民二世代であると同時にダブルであるファタハが描く物語の中に、父と母と自分の関係性を見つけ、そこから祖国と言語に対する彼の姿勢を読み取ってみたい。

## II. 無人地帯と空白地帯

ファタハのデビュー作『国境地帯』<sup>2</sup> では、イラク、イラン、トルコの三ヶ国が国境を接し、しかも地雷の埋まる無人地帯を、地雷を避けて密貿易をする人物が主人公として描かれる。一家の長である主人公は、ある日市場で退役軍人から国境地帯の地雷敷設地図を手に入れる。そのときから主人公である「彼」は地図を頼りに、地雷を避けて国境の町や村にトルコで仕入れた物品を届けては、現金を得る生活を始める。そして一家は湾岸戦争後の混乱する社会にあって比較的豊かな暮らしが送れるようになる。しかしイスラーム学校に通う長男は、そんな家族の暮らしに違和感を覚え、家族と疎遠になっていく。その一方で「彼」は、「赤い家」と呼ばれる内務省治安維持部門に勤めるベノという男と知り合う。息子から目を離さないように、と忠告を受ける「彼」は、息子にイスラーム学校を全面的に信用するなど強く言うが、ますます息子は反発するようになる。そして「彼」は内務省とイスラーム学校のふたつの強い信念を持って動く組織の間に無防備にたださまよっていることに気づく。どちらにも根をおろすことなく、何の拠り所もない無人地帯をさ

---

<sup>2</sup> Sherko Fatah, *Im Grenzland*, Salzburg 2001.

まようがごとく右往左往する主人公。しかも無人地帯ではいつも手にする地雷敷設地図のようなものをここでは持たずに。それは積極的に望んだわけではないが、国家に属することができず、そのうえ宗教団体を信じることができない「彼」の生き様だった。

そしてある日、その無人地帯で一人の若者に襲撃される。一旦は金を奪われるが奪い返し「彼」は無事帰宅する。はたしてそれはベノの言うようなイスラーム過激思想に染まった山岳ゲリラの一員だったのか。それともそうしたゲリラや軍に追われた山岳部の村の若者だったのか。誰にもわからない。ただ「彼」には、自分の息子と同じくらいの年齢の若者が、息子と重なって見えて来るだけなのだ。襲う者と襲われる者、言葉を交わすことなくただ目先の結果を追う者たちに対話もなければ、理解し合うことなどない。だから一旦衝突した後の和解もない。「彼」は息子との関係を改めて思い知ることになる。そしてこのあと、息子が行方不明であることが判明する。軍か警察に捕まったとの情報だけは得る。真偽を確かめるために「彼」は警察、軍収容施設を尋ね歩く。市民を守るはずの警察や軍は、その市民であるはずの密輸業者のために働くことはない。「彼」は知る。「彼」はもはやこうした機関の庇護が及ぶテリトリーの外にいる存在になっていた。否、そもそも軍や警察が彼らを守るようなことはしない。わかってはいてもそれを信じようとはしなかった密輸業者に、今ようやくそれが現実問題として突きつけられた。妻はそれまで祈ったことのない神への祈りに身を捧げ、「彼」は宗教を信じる素振りすら見せず、次第に夫婦の心は離れていく。家族の他に繋がりを持たない「彼」は、糸の切れた凧のように市中を右往左往する。最後まで名前のない密輸業者は、その生業の性質上、匿名のまま、大地にしっかりと根ざすことなく、地雷の埋まる無人地帯もそれを踏むことなく活動する。それは根無し草そのもの。一方で三ヶ国の国境に広がる無人地帯に根をおろすことが許されず、またこの三ヶ国にシリアを含めた広範囲にまたがる地域であるクルディスタンに生活圏を築きながらも、国を持ち得なかったクルド人をも表している。さらにその姿はヨーロッパに出てきたファタハの父にも、そしてファタハ自身にも重ねあわせることができるのではないか。

「ドイツに暮らし、この本を私はドイツ語で執筆しました。つまり、ここに描かれている風景は私の故郷ではないのです」<sup>3</sup>とファタハはこの小説について語っている。ドイツに暮らし、ドイツ語で執筆していても、クルディスタンを故郷だと言えなくはない。しか

---

<sup>3</sup> internationales literaturfestival berlin 2008,  
<http://www.literaturfestival.com/archiv/teilnehmer/autoren/2008/sherko-fatah>

し、ファタハは、そこは故郷ではないと言う。本来なら、この二つの文は「つまり (also)」という接続詞的な副詞で繋がる文ではない。そこには大きな飛躍がある。それを生み出した要因は、移民を背景に持つ人に向けられる無言の圧力だったのかもしれない。多くの読者は彼の名前やその姿から、彼が異国の出だと想像する。そのうえクルディスタンを舞台に小説を描いているとなれば、そこが彼の故郷だろうと読者が思っても不思議ではない。そんな想像を一切受け付けなと言わんばかりに、「つまり」で飛躍するファタハ。一体これまで彼の身の上どんな嫌悪すべきことがあったのだろうか。もしファタハがシュミットという名前の金髪碧眼だったら、このような発言をする必要はなかっただろう。そもそもドイツに暮らしドイツ語で表現していることを敢えて断らなければならないことに、移民第二世代やダブルが抱える問題が透けて見える。ファタハという名前からだけでドイツ人ではないと判断し、舞台となる異国が彼の故郷だとするのは早計なのだ。だが、この小説の舞台が彼自身の父親の故郷であることを積極的に述べてはいないが、それを否定はしていないところに、まだ何かファタハ自身の中で引っかかるものがあったのだろうか。小説のなかでの親子の確執を知る読者は、そうした表現に彼と父との確執のようなものを想像してしまうのも、あながち間違った勘ぐりではないような気がする。

第二次世界大戦中の東部戦線の後方地域、ナチス・ドイツが機動力と鉄路で東方へ進軍した結果、補給が追いつかないほどにソ連へと張り出した前線のその後方に、ぽっかりと現れた雪に覆われた白い大地、いつゲリラが出没してもおかしくない作戦地図上の空白地帯に、『白い大地』<sup>4</sup>の主人公アンワルは送られる。『国境地帯』の主人公の密輸業者と同様に、この空白地帯でアンワルの所属するナチス・ドイツ武装親衛隊（外国人部隊）は行くべき方向を見失う。ラシード・アリー・アル＝ガイラーニー首班によるバグダードでの1941年のクーデタ失敗の後、その首班を陰で操る大ムフティ、アーミン・アル＝フェイニーの用心棒として怪鳥ロックならぬイタリア軍機に乗せられてアンワルはベルリンへ送られる。しかし、この大冒険のその顛末が、大ムフティからの厄介払いと空白地帯での出口の見えない迷走だった。

縁もゆかりもない土地をさまよいつけるアンワルは、故郷イラクを後にして東ドイツ、オーストリア、西ドイツを転々とするファタハの父と重なりはしないだろうか。そしてその父と行動を共にするファタハ自身ともどこかで繋がってはいないだろうか。彼自身つねに余所者として見られていると感じているのは、先の彼の言葉から想像できる。ただファ

---

<sup>4</sup>Sherko Fatah, *Ein weißes Land*, München 2011.

タハにしてみると、そこは母親の母語であるドイツ語圏の国々であり、彼自身の母語でもあるドイツ語の国々だった。

アンワルはさらに辛酸を舐める運命にあった。ポーランド国内軍による蜂起で混乱するワルシャワに部隊は投入される。仲間は次々と戦闘で斃れ、アンワル自身も大怪我を負い、野戦病院に送られる。失った記憶を取り戻しながらドイツへの撤退を続けイラクへと帰還するアンワルの物語は、家族をドイツに残してイラクに帰ったファタハの父と重ねることができる。出て来た者も戻るということを、ファタハはアンワルの物語で表現し、同時に父の行動に重ねていた。では、父を重ね合わせる意味は何であろうか。

### III. 父と息子

子供は親を親としてしか見ていない。親がどのような子供時代を過ごしてきたかを知らないし、ましてや子供と接している時以外の親を知ることは少ない。ファタハの小説では親子の関係が描かれることは少ない。あるいは父親の圧倒的な不在と言ってもいい。そこで、父子の関係が比較的多く描かれている『白い大地』を見ながら、この関係性を考えてみたい。

父の姿が目の前に浮かぶ。背は低いがかがしりした体格の男で、高邁な理想に燃えていた父の姿が。父にとっても 1920 年代、30 年代は間違いなく変革の時代だった。彼はレンガ工場の監督として働いていた。大声を上げ、手を打ち鳴らすだけでなく、制裁棒を使うこともあった<sup>5</sup>。

この父が幼いアンワルにイラクの現実を見せつけ、王国とは名ばかりのイギリス委任統治下に生きるイラク人を批判する。この言葉が、遙か遠くで行われた戦いを生き残り、這々の体で故国イラクに戻ってきた彼の耳には、今も鳴り響いていた。

我々の民族は教養のない農民で、世界で何が起きているかなど、想像もつかないのだ。彼らは何も学ばず、仕事があればなんでもする覚悟がある。それが、彼らが考えていることのすべてだ。俺が奴らをこらしめると、奴らはいじけて自分を卑下

---

<sup>5</sup> Sherko Fatah, *Ein weißes Land*, München 2011, S.36.

するような、それと同時に恨むよう目で、俺を見上げるのだ。国全体がこんな感じで、いじけていて憎しみに満ちているのだ。<sup>6</sup>

ヨーロッパの外れまで駆り出され、生死の境をかい潜り、彼の昔を知る者が彼だとわからないくらいに顔が変り果て、全く別人のようになって故国に戻ってきしてみると、ヨーロッパの戦争の影響ももはや消え失せ、以前と変わらぬ人々の暮らしぶりに、ふと父のこの言葉をアンワルは思い出す。しかし、留守がちの父との思い出も、幼少年期までで、青年になりアンワル自身の世界が広がるとともに、父との結びつきは弱くなり、そして 1941 年のクーデタ後は父との関係が断たれてしまう。

他の小説でも少年期の息子と父との関係が描写されるが、大人となった息子がひとりの男としての父親を見ることはない。『暗闇の船』<sup>7</sup>では父親は主人公ケリムが成人する前に殺されるので、父に関する思い出はそれほど多くない。そのうえ父親は口数が少なかったので、彼ら一家がどのような出自であるか、ケリムは多くを知らない。彼らがトルコのトゥンジェリ<sup>8</sup>に住んでいたことがあり、アレヴィー派のクルド人であること以外、ケリムには伝わらなかった。この一家には、つねに戦争がつきまどっていた。1980 年からのイラン・イラク戦争、そして 1988 年のハラブジャ事件、さらに湾岸戦争と、一家が戦争に巻き込まれることはなかったが、戦争による社会の変化が一家を翻弄し、ついにはケリムがイラクを出て避難民としてドイツに入国する。ただし、主人公自身はこうした戦争が彼の人生の歯車を狂わせたのではなく、彼自身がついた嘘が彼をこのような運命に投げ入れたのだと感じているのは、また別な話。

ファタハは『暗闇の船』で、イラク北部で食堂を営む主人公家族や主人公を拉致し強制入隊させたイラク北部山岳に潜むムシャヒディーンを名乗るゲリラグループを登場させ、

---

<sup>6</sup> Ebd., S.36-37.

<sup>7</sup> Sherko Fatah, *Das dunkle Schiff*, Salzburg 2008.

<sup>8</sup> かつてディルスムと呼ばれていた場所。1937 年、38 年、クルド人を山岳トルコ人だとするある種の民族浄化に抗して、ディルスムで最後で最大の反乱が起こり、トルコ政府によって大量の死者を出し鎮圧される。以後にこの名になる。この反乱で幼くして生き残った者は、トルコ人家庭に引き取られ、あるいは連行され、トルコ人化がなされた。どのような経緯でケリムの父がイラクに来たのかは不明だが、この反乱の生き残りの一人だろう。しかも幼少期にそれを直接体験したと思われる。ファタハがどうしてこの地を家族の出身地としたのか、明確な答えは見つからない。いま難民となってヨーロッパに押し寄せるクルド人の迫害の根が、オスマン帝国解体にあり、それが現代まで一本の線で繋がり得ることを指摘しているのだろうか。ムラトハン・ムンガン編『あるテルスィムの物語』磯部加代子訳、2017 年、埼玉。参照。

この地域の街や村、そして辺境の集落の暮らしを描いている。また『国境地帯』をはじめ、彼の全小説6編のうち5編はイラクを舞台としているところから、ファタハの関心はつねにイラクにあると言っていい。それは彼の故郷というよりは彼の父の故郷だった。小説の主人公たちと同様に、父の国イラク、とりわけイラク北部クルド人の暮らす土地、ファタハは父の国を描くことで、父を知ろうとしているのではないか。父に近づこうとしているのではないだろうか。

ひとりの人を知ろうとして、その人が生活した場所を訪ねてみたくなることがある。こうした動機でドイツからイラク北部の町スレイマニヤを訪ねるのが、『おっちゃん』<sup>9</sup>の主人公ミヒヤエルだった。ミヒヤエルは果たして一人の人間を理解するに至るのだろうか。

#### IV. 見えるものと見えぬもの

物語は、一羽の白鳥を捕獲してそれを調理した回想から始まる。クリスマスイブの晩、白鳥を捕まえに湖に向かう4人の男の中に主人公ミヒヤエルはいた。イラク出身の建設現場労働者のラーマン、大学生ディミートリ、東ドイツ出身のトーマス、そしてもう少しで30歳になるが、未だに学生の主人公ミヒヤエルの4人が、七面鳥ならぬ白鳥でクリスマスを祝おうというのだ。血みどろの部屋の中に、羽毛が舞う。オープンに入れた肉は、野獣特有の異様な匂いを放ち、部屋に充満する。たまらず彼らは窓を開け放ち、ウォッカを飲み始め、大声をあげて歌い出す。小説冒頭の乱痴気騒ぎは、近隣の通報で警察が登場してその幕を閉じる。親からの仕送りでのりくらりと学生生活している主人公ミヒヤエルが、どうしてこの連中と一緒に行動していたのか。そのきっかけを作ったのが、イラクのクルド人地区から来た二人の難民だったことが明らかになる。

ニナという女性と彼女に「おっちゃん」と呼ばれるオマルの二人は、ヨーロッパへ逃れてくる途中のバルカン半島の難民仮収容施設で知り合った。二人ともイラク北部のクルド人地区から来たということで、その後行動を共にし、ドイツにたどり着く。そして別れ別れになることを恐れて難民申請をすることをためらっている二人を、ラーマンが匿まっていた。何気ない日常の風景のなかに、一台のひどく汚れたバスが停まっているのにミヒヤエルが気づいたのがこの始まりだった。そのバスにはその背後の住居から電線が伸び、

---

<sup>9</sup> Sherko Fatah, *Onkelchen*, Salzburg 2004.

バスのなかに給電している様子をいぶかしく思ったミヒヤエルが、給電元の住居を興味本位で訪ねたのが彼らとの出会いだった。そこにいたのがニナとオマルだった。年配のオマルはイラクで受けた拷問のため、彼女以外の人間とは一切口をきかない。それどころか、拷問で負った障害のため、話すことすら不自由だった。そんな二人にミヒヤエルは関心を抱き始める。しかし実際はニナへの関心だとミヒヤエルは気づいていた。

オマルをあつ頃ニナに送り届けて、彼女を見た時、ミヒヤエルは何かを彼女と分かちあいたいと、理由などなく思ったのだ。彼の自分ではどうすることもできない好意はオマルへと向けられた。なぜなら、ラーマンから直接聞いたように、オマルがそれほど深くニナと結びついていたからだ。<sup>10</sup>

本来ニナに向かうべきミヒヤエルの愛情は、オマルを経由することで屈折する。このねじ曲がった愛の行方は結局、実を結ぶことなく小説の途中で途切れる。それはすでに小説の表題が示していた。ファタハの関心が「おっちゃん」と呼ばれるオマルに向けられている。だから、ミヒヤエルの関心もそちらに向かわざるを得ない。では、ミヒヤエルの目にはオマルはどのように見えていたのだろうか。この言葉を交わすことのできない人物をどう見ていたのだろうか。

このおっちゃんですとすることは、その目だった。目は彼が見たもの何一つ映し出さないのだ。オマルの目には表情がないのだ。この日、路上で突然このことがミヒヤエルにハッキリとした。無関心と言えれば、まだ慰めとなっただろう。実際、彼は無関心というわけではなかった。ともかくも彼はそこに存在していなかったのだ。<sup>11</sup>

オマルの瞳はいま現在を映し出すことはない。口腔の裂創と舌の機能障害をドイツでなら治療可能だと希望を抱き故郷を後にしてきたものの、不法難民となったいま、その可能性は消え、いまはただ生き長らえているだけなのだ。彼の瞳にミヒヤエルが見たものは大いなる絶望だった。ドイツに身体はありながら存在しないオマルを知るために、かつてオ

---

<sup>10</sup> Sherko Fatah, *Onkelchen*, Salzburg 2004, S.49.

<sup>11</sup> Ebd., S.51



マルの瞳に映っていたものを探しに、ミヒヤエルはラーマンとイラクへ向かう。オマルに何が起こったのかを確かめるように、ニナとオマルが辿ったルートを遡るように彼らはイラクを目指す。ニナから聞いた話をもとに、彼らはオマルが人目を避けて潜んでいた小屋を見つけ出す。ミヒヤエルはそこでオマルがどのような暮らしをしていたのか想像を巡らすのだった。オマルが体験したことをそのままに追体験することはできないが、ミヒヤエルはオマルの瞳に映っていたものを、このときようやく見る事ができたのだ。こうした想像の旅を続けながら、彼らの現実の旅は目的地スレイマニヤに至る。

スレイマニヤでミヒヤエルはイギリス人写真家と知り合う。彼にオマルやオマルの辿った道を旅していることを語ることで、ミヒヤエルはこれまでの自分の旅を客観的に見つめることになる。ミヒヤエルの話を聞いた写真家は、オマルが拷問を受けた場所が秘密警察の本部ではないかと言う。湾岸戦争直後にクルド人武装隊（ペシュメルガ）によってそれが破壊された時、写真家はその現場に立ち会っていた<sup>12</sup>。この会話の中で、読者はその建物がかつて「赤い家」と呼ばれていたことを知る。それは『国境地帯』で内務省治安部門に勤めるベノの職場で、密輸業者が息子を探して足繁く通ったところだった。さらに、『暗闇の船』の主人公ケリムの父を殺害した連中の職場でもあった。ペシュメルガの後に続いて迷路のような「赤い家」に足を踏み入れた写真家の話を聞いて、その場所がどんなところだったのか、もはやそこを訪ねることなど不要なほど、ミヒヤエルは想像することができた。この想像力は人の話を餌にますます研ぎ澄まされていく。ラーマンがミヒヤエルをある場所に連れて行った時のミヒヤエルの反応に注目してもらいたい。彼の想像が大きく膨らみそうになった瞬間、ラーマンの言葉が途切れる。沈黙の中で彼の膨らみかけた想像は萎んでいった。

彼らは雑草の生えた敷地に足を踏み入れた。ミヒヤエルはラーマンの後を葡萄の蔓が垂れ下がった日陰の小道を進んだ。それは静かな中庭へと続いていた。テーブルが二つ、壊れた椅子が数脚、そして芝の上には雨に濡れたコップがあった。庭の塀には背広を着た男のセピア色の写真が入った額縁が立てかけてあった。

「これは誰だ？」

ラーマンは肩をすくめた。「俺が知るってるわけないだろ。これは新しいものだ。壁伝いに来い」。彼は小窓から台所の中を見た。それから手のひらで扉を押し開けた。

---

<sup>12</sup> Vgl., ebd., S.177-193.

ミヒヤエルは躊躇していた。

「さあ、来いよ」、とラーマンは中から大声で言って、「この家は誰も住んでいないだ」。

ここは実際そうだったが、まさにそれだからこそこの注意をミヒヤエルはいぶかしく思った。

「いいかい」と、彼らがカビ臭いがらんとした部屋を歩き回っている時、ラーマンは言った。「ただ長いこと遠くに行っていると、なんでも自信がもてなくなるもんだ。この家はほぼ 20 年前からもぬけの殻さ。なぜなら家は古いの、壁が湿気ているときているからな。その前はここで俺が育ったんだ」。

その瞬間すぐにミヒヤエルはこの部屋を違った目で見えたのだ。少しの間、彼はあたりを見廻し、ラーマンがここでの生活について何か語るかもしれない、と待ち構えた。でも奴はあたりを見廻しているだけで、一言も話さなかった<sup>13</sup>。

ミヒヤエルの関心をとりたてて引くような物などない、荒れ果てた古家がかつてラーマンの暮らした場所だとわかった瞬間、ミヒヤエルには違って見えたのだ。この想像力で、彼はこれまでオマルの足跡を訪ねてきた。そしてその想像力に火をつけるのがニナの話や写真家の話だった。その一方でラーマンは、オマルの弟ハサンを見つけ出す。そのハサンの案内で山岳部の村にあるオマルが最後に過ぎた場所、彼の隠れ暮らした家をミヒヤエルとラーマンは訪れる。そしてオマルが連行される前に身を潜めていた小部屋を見つける。部屋の壁にそれほど大きくない穴があり、その向こうに小部屋、というよりは空洞と言っているような場所があった。彼を連行しようとする人間が訪ねて来た時に、オマルはそこに隠れ、その時にはレンガで壁の穴が埋められたのだという。彼がどのような思いでその部屋にいたのかを身を持って体験したい、とミヒヤエルは言い出し、小部屋に入り、レンガで穴をふさいでもらった。話もできない男が体験したことを、どう理解しようと言うのだろうか。意思疎通が拒絶されてもなお、ミヒヤエルはオマルを理解しようと言うのだ。知ろうとした人物がかつてそこにいたその場所に自らもその場に立って確認すること、これは近づき得ない人に対してミヒヤエルができる数少ない行為なのだ。ミヒヤエルの目に映るもの全てを遮断し、見えないものを見ようとするミヒヤエル。少なくともこういう形でしかミヒヤエルはオマルに接近し、理解する他なかったのだ。

---

<sup>13</sup> Ebd., S.206.

オマルがこうして身を隠している間に何を考えていたのか、ミヒヤエルは暗闇の中で想像を巡らす、いつしか在りし日のこの土地でのオマルの暮らしの描写へと移行する。これはハサンから聞いた話なのか、それともニナから聞いた話なのか、それは判然としない。それともミヒヤエルの想像力が産み出したものなのかもしれない。いずれにしても、オマルのように体験した者では伝えられない現実を見ているのではないか。狭いところで同じ姿勢でいたミヒヤエルは体の痛みを感じて、思わず懐中電灯を点けた。その瞬間、狭い空間全体がミヒヤエルの目に飛び込んで、これまで見えていたものを掻き消した。再び明かりを消すと、オマルがどうして拷問を受けることになったか、それまでの暮らしぶりの描写が再び始まる。

ミヒヤエルはこの暗い空間で何を体験し、オマルの何を知ったのだろうか。出てきたミヒヤエルは、通訳を務めるラーマンを通じてハッサンに尋ねられた。

「お前が彼の兄の亡霊に出会ったか、彼は知りたがっている」とラーマンは通訳した。

「いやいや、でも彼に言ってくれ、僕は限りなくオマルの近くにいたんだ、ひょっとすると僕が彼の前に座っていた時よりもずっと近くにね」<sup>14</sup>

その一方で、この行為で何かを発見したかとラーマンに尋ねられると、「あの遠く離れた国で知り合った彼の兄を、この時少しばかりは知ったようだ」<sup>15</sup>と答えている。自分でさえ何者であるのか理解し得ないように思えるのに、他人を理解しようすることは、言ってみれば傲慢な行為である一方で、そうしたことをわかっていても理解したいというある種純粋な動機を、ファタハは全く否定していない。理解し得ないとわかってもお理解しようと言う行為は、捕まえたと思ったその瞬間に離れて行くような一人遊びの影踏みのようなものなのかもしれない。しかしこの行為にミヒヤエルの心は満たされていたに違いない。街への帰り道で、山岳ゲリラに襲撃されたミヒヤエルは大怪我を負った。でもその傷はオマルの記憶として彼の体に刻まれる。たとえドイツに戻ってオマルに再会できなくても。そして実際オマルに近づいたと思ったそのとき、オマルはいなくなっていた。ミヒヤエルがオマルを知ろうとするように、ファタハは父の国、父の故郷を描くことで、父を知

---

<sup>14</sup> Ebd., S.260.

<sup>15</sup> Ebd., S.264.

ろうとしている。たとえ父親の実像に出会えなくても、父への接近という行為自体に意味がある。父親の存在は大きい。ファタハの小説では、父親の故郷が舞台とならないことはほとんどないからだ。父親無くしてファタハの小説は成立し得ないとは、言い過ぎではないかもしれない。では、もう一本の横糸である母はファタハにどのような影響を与えたのだろうか。

## V. 母

ファタハの小説では、母親は常にその遠景に存在している。『白い大地』の主人公アンワルの母は、彼が生まれてすぐに亡くなっていることから、アンワル自身その記憶すらない。主人公の母親が登場、または言及される時、彼の作品に共通する母親像、つまり典型的母親像は、自分のために何か積極的に行動に出るというより、息子の為になるように自分は行動するという受動的なタイプだった。こう見てくると、父親以上に母親の圧倒的な不在という特徴が見えてくる。それは何を物語っているのか。

これまで見てきたように、父親の土地を描くことは父を知ろうとすることの代償行為だと考えられる。だとすると、母親の不在も何らかの代償行為が起きていると考えてもいいだろう。しかしそれに類した描写が見当たらない。ではその理由は何か。父の土地を舞台に物語を紡ぎ出すことで、父を知ろうと、父に近づこうとしたファタハには、母を知ろうと、母に近づこうとして何かを描く必然性がなかったということだろう。母の国ドイツに暮らすファタハにとって、母の国を描いて母に近づく必然性がなかっただけなのだ。母の国に生まれ、母の土地に暮らし、母のことばを自分のことばにして、そのことばで物語を紡ぎ出す。母が創作に現れなくても、母のことばで綴る限り、母は側に居続けている。

しかしファタハにとって母をイメージさせる存在が一切描かれていないのかというと、単純にそうとは言い切れない。ファタハ唯一の歴史小説『白い大地』の中で、ファタハの母を思わせる人物が登場しているように思えるからだ。何故そう思えるのか。それは彼の作品に登場する女性たちの中で、この人物だけが他の女性たちと異なるのだ。1941年当時のドイツにあって明らかに異質な存在に見えたはずのアラブ人のアンワルに、自分とは関わりのない異質な存在と決めつけることなく彼女は接しているからだ。しかもその姿勢は単なる職業的な義務でないことを十分感じさせる。彼女がアンワルに恐れを抱いていないことは、二人の出会いから伝わってくる。そこには西洋の女と中東の男、つまり母と父の出会いが描かれている。

大ムフティ・アーミン・アル＝フセイニーの用心棒としてベルリンに来たアンワルは、大ムフティがベルリン市中に滞在する時、彼の定宿の最高級ホテルのスイートルームの扉の前で寝起きすることになっていた。

僕を起こしたのはささやき声だったが、僕は眠りからさめながら、自分がどこにいるのか、わからなかった。硬い床を感じ、弱々しい一条の光を見上げ、馴染みのない匂いがして、僕はいぶかしく思った。体を起こしたが、座ったままでいた。そしてそれがメイドだとわかった。銀のお盆にロウソク一本とティーカップを載せ、両手でそれを持って、僕の前に立っていた。

「ご主人が紅茶をご所望されたの」と彼女はささやき、頭で扉のほうを指した。僕がこの敷居に寝ているのを見ることは、妙な話だとメイドは思ったかもしれないが、それを彼女はおくびにも出さなかった。色とりどりのガラスの<sup>シェード</sup>笠の下、揺らめくロウソクの明かりの中で僕は彼女をまじまじと見た。僕はすぐに彼女が気に入った。そして、それはレース飾りのついた前掛けとメイド帽といった彼女の制服姿の所為ではないか、と心の中で思った。(中略)僕が黙ったままでいると、もう一度、頭で扉を指した。彼女は僕のことをどう思っているのだろうか、と自問した。僕は要人の使用人であることを、恥じてはいない。僕は他に経験をしたことがなかったし、自分の身分について深く考えようなどと、こんなことがなかったら思わなかっただろう。しかし今、銀の留め金のついた、しっかりした作りのお仕着せのメイドの靴、彼女の黒いタイツとカーテンのような襞のついた濃い色のスカートを見たとき、僕はなんだか居心地が悪くなった。僕は立ち上がり、彼女の前に立ち、肌がむずかゆくなるくらい、自分の顔を彼女の顔に近づけた。

「君の名前はなんていうの？」と僕は囁いた。

微笑んで顔を大きく崩したことで、彼女がまだ若いと僕にはわかった。

「エルザ」。彼女はクスクスと笑い、何かしてはいけないことをしてしまったかのように、それとなく辺りを見廻した。<sup>16</sup>

彼女はアンワルとの出会いを恋人ヘルマンに報告しているが、その中でアンワルに対す

---

<sup>16</sup> Sherko Fatah, *Ein weißes Land*, München 2011, S.241-242.

る大ムフティの扱いが人間扱いでないことに腹を立て、アンワルに大いに同情していた。また、大失態を演じたアンワルに、エルザは毅然とした態度で接するが<sup>17</sup>、それでいて全く見放してしまうようなことはなかった。その証拠に、その後も彼を窮地から救い、さらに彼女の恋人を含めて三人でベルリンの市中に飲みに出たりしている。1940年代のベルリンを舞台に、連合国による空襲が始まり徐々に戦争の影響が首都にまで及び、街が物理的にも精神的にもその明るさを失う中で、エルザはアンワルにとって、そして読者にとっても心を和ませる唯一の灯火のように思えてならない。アンワルは彼女を最後まで恋愛の対象と見ることはなかった。彼は彼女の中に自分をどこかで庇護する母性を感じていたに違いない。

## VI. エクソダス

ファタハの小説の主人公たちは元の場所に帰ってきて、あるいは行った先で何かを得たかという、むしろ失ったものの方が多かった。さらにそうした彼ら何がしかの者になったのかという、そんなことはなかった。密輸業は息子を見つけられず、アンワルは多くを失って元の使いの者に戻り、ミヒャエルはオマルに再会できず、ドイツで難民認定されたケリムはそのドイツであっけなく殺される。つまり教養小説の主人公とは異なり、ファタハの描く主人公たちは成長することはない。特異な状況下に置かれた彼らは、普通の人間として、自らの弱さを曝け出しつつ、その状況に流されていく。そうした形でファタハは人間の多様な生き様を読者に見せつける。それは彼が人間の見えない側面を捉えようとしていることの証左ではないだろうか。

私は決して避難民ではなかったうえに、ドイツ語は私の母語なのです。それでも、私がここ（ドイツ）にいるとき、自分は何者かという問は、前々から私に創作の原動力を与えただけではなかった。<sup>18</sup>

---

<sup>17</sup> アンワルは同じホテルに宿泊するドイツ人女性に誘われて、夜中に持ち場を離れ、その女性と性的関係を結ぶ。しかし、持ち場を離れたことが翌日判明し、どこにいたのかと問い詰められ、真実を告白し、その女性の部屋に大ムフティとその随員たちを案内し、自分がそこにいたことを証明しようとする。しかしその部屋の女性はすでにチェックアウトし、エルザが部屋の掃除をしていた。証拠の品を発見してはしゃぎ回る男たちに対して、エルザはその証拠品をもぎ取り、男たちを制して、自分の仕事を続ける。Vgl., ebd., S.281-283

<sup>18</sup> Sherko Fatah, Vorwort. In: *Weg sein – hier sein*. Texte aus Deutschland. Mit einem Vorwort von Sherko Fatah und 19 Porträtfotografien von Mathias Bothor, Zürich 2016, S.11.

父親と母親、半分ずつもらった命。父と母との影響を受け子供は育つ。生まれた環境のみならず、父や母から受け継いだ外見を含めた遺伝的要因も子供の人生を規定してしまうことがある。父の祖国はベルリンで生まれたファタハのものにはならなかったが、父となって彼の中に留まり続ける。父が祖国を離れなければ、母との出会いもなく、ファタハも生まれてはいない。だとすると、父がイラクを出ることで生じた諸々は、ファタハの運命として受け入れざるを得ないのだ。育った環境や外見だけで個人を認知することへはいささか抵抗を感じながらも、ファタハはむしろそれを作家として生きることによって文学へと昇華させている。そのとき使われる言語は母のことばドイツ語。母語や生まれ育ったベルリンに故郷を重ねる一方で、体のどこかに父を思い、父を感じているに違いない。

2014年春、ファタハの父が亡くなる。彼はそのとき「自分の命の一部が消え去ってしまうようだった」<sup>19</sup>、と私に教えてくれた。父は消え去ったが、父は記憶となって彼の体にとどまり続けるだろう。

---

<sup>19</sup> E-Mail von Sherko Fatah an K.Suzuki, 17.07.2017. „Es ist ja, als würde ein Teil des eigenen Lebens verschwinden.“